

---

# 二つの魔眼を持つ少女

正午の投稿者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二つの魔眼を持つ少女

### 【Nコード】

N9162Z

### 【作者名】

正午の投稿者

### 【あらすじ】

聖杯戦争の末に起きた、穢れた聖杯からこぼれた聖杯の泥による呪いの大災害。その災害を生き残ったものの中で、唯一気を失わなかった少女がいた。本来存在するはずのなかった少女は、何をしで、何を成し遂げるのか。

作者はFate知識はあまりありません。他作者の作品を呼んでいて、自分も影響されてかいて見たいと思って書いた作品です。よって至らない点があったらご指摘くださいますようお願いいたします。

## 冬木市大災害

突然だが、私には、不思議な力がある。それも、四つもある。

一つは、遠いところでも問題なく見えてしまえる目。それも、かなり離れている場所にある木々の木の葉の動きまでしっかりと見ることが出来る。異常としか言えないくらいに、良すぎる、目だ。

二つ目は、ものを透き通して、その向こう側の状況を見ることが出来る目。そして、思った通りの場所を映し出す目。透視って、言うんだらうか。

探し物があるときなんかは、よく使ったりするかな。

三つ目は……未来を見る目。それも、明日とか明後日とか、そんな近い日のことなんかじゃない。どれくらい先のことを見るかは決められるみたいだけど、半年とか、一年とか……かなり先のことを読み取れてしまう。

でも、あまり先のことを長い間見ようとすると酷い頭痛に襲われるから、それ程は使えない。と言うよりは使っていない。

で、四つ目は。見たものがどんなものなのか、どんな風に存在してきたのかを見れる目。

視界に入れただけで来歴以外の全ての情報を見れてしまう。ある程度は自制が聞くんだけけど、自制をやめると情報が多すぎるのか、やはり頭が痛くなる。でも、実はこれが一番お気に入りだったりする。好奇心や探究心が満たされるからだろうか。

でも、周囲の人には言っていない。ううん、親には言ったことがある。最初は信じてくれなかったけど、私が実際に『見た』ことが、実際後日起こった、何てことが何度かあったから、今は信じてくれているみたいだ。

周囲の人に言っていないのは、お母さんに『黙っておいた方がいい』と言われたからだ。

だから私は皆には隠している。

さて。そんな不思議な力を持った私は今、街の中をさ迷っていた。周囲は瓦礫の山。人『だった』モノ。そして全てを焼き尽くす炎。まさに阿鼻叫喚の、地獄の中。そんな中を私は一言も根をあげることなく歩いていった。

未来を見る力があるのだからこんなことに巻き込まれることなんてないんじゃないのかと思うだろうけど、私は未来を見よう、何て思わない。そうすると余りにもつまらないから普段はあまり見えない。と言うのは詭弁で、本当のところは頭痛が嫌だったから、というのが理由だ。力そのものには忌避感はないのだけど。

でも、こんなことになるんだったら、もつと使っておくんだった。そうすれば、私は、少なくとも私と私の家族は、逃げ延びていたかもしれない。

しばらく、歩き続けた。どれくらい歩いたか、わからないくらい歩いた。いつの間にか、雨が降ってきていた。熱に呼ばれたのだろう。

私は歩き疲れて、近くの瓦礫に座り込んでいた。

……これから、どうしよう。

親は死んでしまった。帰るべき家は燃え尽きてしまった。

私が助かったのは、奇跡でしかない。

残されたのは、衣服と、生まれ持った四つの不思議な力だけ。でも、世の中これで生きていけないだろう。

……どうしよう。

あれこれと考え込んでいると、不意に一人の男の子が歩いて来るのを見つけた。私より五歳くらい、年下の少年だろうか。

だが、もう体力の限界なのだろう。ふらふらで、足取りがしつかりとしていない。事実、私の『眼』が、しっかりと彼の情報を彼の体力がもう限界であることを示している。

そして、案の定というべきか、正面を少し通りすぎたところで、



「衛宮切嗣さん……。あの、この子を助けてくれませんか？」

「この子も生きているのかい!？」

衛宮さんは男の子を仰向けにして、胸に耳を当てている。

「生きている……。! でも、これじゃあ……。」

私ももう一度男の子に視線を落とす。再び、この子の情報が頭の中に入ってくる。

『名前 土郎、年齢7歳、肉体面心拍数、脈拍数、呼吸に異常あり、生命維持危険域』

それらの情報を『視て』、ぞつとした。

生命維持危険域……。? よくわからないけど、もう死にかけていうこと!？」

「衛宮さん!」

「わかつてる! ……そうだ!」

衛宮さんに、早く助けて、と言おうとして逆に制されて。

そして、衛宮さんは何か思い浮かんだのか、自分の胸に親指を突き立てた。瞬間、衛宮さんの体から光るなにかが出てきた。

それは、

「……………? ……アヴァロン……………?」

『視た』情報によれば、そういう名前の、エクスカリバーという剣を納めるための鞘みたいだ。

保有している人を守る力があるみたい。お守り的なご利益でもあるのかな。それから体を治す不思議な力もあるようだ。

衛宮さんはそれを男の子、土郎君の体に押し付けた。すると、鞘は再び光になって、土郎君の体に溶け込むかのように消えた。

「これで助かってくれればいいけど……。」

「……………多分、大丈夫だと思います……………」

「……………何故だい?」

確信めいた口調でそう呟くと、衛宮さんは怪訝な顔でそう聞いてきた。

「……………何となく、ですがそれではダメですか?」

まだ力については言うのは早いと思い、私は適当にはぐらかすことにした。

「……そっか。うん。きっと助かると思うよ」  
切嗣さんは、笑ってそういつてくれた。

これが、私が『衛宮』の姓を名乗ることになったきっかけの事件で、私の二人目の『父』と出会った瞬間だった。

## 冬木市大災害（後書き）

主人公設定

佐久間 彩華 衛宮 彩華

外見

黒髪・瞳は黄金色。顔立ちは十人中八割は振り返る。女でも羨望や嫉妬で振り返る。

瞳の色が黄金色なのは魔眼によるもの。

能力値

筋力D 耐久C

魔力B 幸運B

俊敏C

スキル

黄金率 B

人生にどれだけお金が絡むかを示す。

カリスマ C

集団を指揮する才能。

千里眼 EX

視力や動体視力の向上。これのほかに透視や未来視なども出来る。生れつき。

未来視や透視などは意識を集中しないと出来ない。

解析の魔眼 A



見たものの詳細情報を解析できる。その他、集中すれば見たものが積み重ねてきた歴史を追体験することもできる。生れつき。

ある程度情報の取得量は自制が利くが、気を抜くとすぐに莫大な情報が流れ込んで来る。

魔術について

他者の魔術、結界などに対するハッキングとクラッキングに才能がある。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9162z/>

---

二つの魔眼を持つ少女

2011年12月29日12時52分発行